※伊達家より家紋使用許可済み

第二十一回 仙台青葉能

喜多流 能
弓八幡（ゆみやわた）
シテ 佐々木 多門

和泉流 狂言
二人袴（ふたりばかま）
人間国宝 シテ 野村 万作

喜多流 能
隅田川（すみだがわ）
人間国宝 シテ 友枝 昭世

「隅田川」友枝昭世 所演

平成30年5月19日(土)
午後1時30分開演(12時50分開場)
電力ホール(仙台市青葉区)

入場料(全席指定・税込) S席 10,000円 A席 8,000円 B席 6,000円 学生席 2,500円 2月14日(水)10:00～ 一般発売

主催／仙台青葉能の会、(公財)仙台市市民文化事業団、河北新報社
共催／電力ホール

お問い合わせ/河北新報社企画事業部 ☎022(211)1332
※10時～17時 土・日・祝休

◆協力 仙台市博物館、中尊寺、(公財)瑞鳳殿、NHK仙台放送局、伊達家伯(かはく)記念會、白石市古典芸能伝承の館「碧水園」
◆後援 宮城県、仙台市、宮城県教育委員会、仙台市教育委員会、仙台市能楽振興協会
TBC東北放送、仙台放送、ミヤギテレビ、KHB東日本放送、Date fm、松井建設㈱東北支店

プレイガイド 藤崎、仙台三越、チケットぴあ(Pコード 484-721)、日立システムズホール仙台、仙台銀行ホール イズミティ21
河北チケットセンター(電話受付のみ) ☎022(211)1189 ※10時～14時 土・日・祝休
※学生席は河北チケットセンターのみで販売 ※未就学児のご入場はご遠慮ください。

beyond 2020

第二十一回 仙台青葉能

※伊達家より家紋使用許可済み

献香之儀

仙台伊達家十八代当主　伊達　泰宗

開演　午後一時三十分

一時四十五分

喜多流　能　弓八幡（ゆみやわた）

ツレ・男　佐藤　陽
後シテ・高良ノ神
前シテ・老翁　佐々木多門
ワキ・陪従使　森　常好
ワキツレ・従者　森　常太郎
アイ・八幡山下ノ者　深田　博治
大鼓　國川　純　太鼓　小寺真佐人
小鼓　鵜澤洋太郎　笛　松田　弘之
後見　佐藤　章雄　佐藤　寛泰　友枝　雄人
中村　邦生　大島　輝久　長島　茂
地謡　金子敬一郎　粟谷　明生
友枝　真也　狩野　了一

――休憩二十分――

和泉流　狂言　二人袴（ふたりばかま）

聟　中村　修一
親　野村　万作
舅　石田　幸雄
太郎冠者　月崎　晴夫

喜多流　能　隅田川（すみだがわ）

シテ・梅若丸ノ母　友枝　昭世
ワキ・隅田川渡守　森　常好
ワキツレ・旅商人　森　常太郎
大鼓　國川　純
小鼓　鵜澤洋太郎　笛　松田　弘之
後見　内田　安信　友枝　雄人
地謡　塩津　圭介　金子敬一郎　狩野　了一
内田　成信　大村　定
大島　輝久　香川　靖嗣
長島　茂

終演予定　午後五時二十分頃

能「弓八幡」

捕らわれた鳥魚を放ち逃す、放生会（ほうじょうえ）で有名な男山八幡宮。

その如月の御神事に後宇多院よりの臣下（ワキ）が参詣の使いでやってくる。神前へ錦の弓袋をかつぐ老人（前シテ）が臣下の前に現れ、これを帝へ捧げたいのでお渡ししたいと言う。それでは袋から弓を取り出して見たいと言うと、袋に入れたまま奉納するのが武器不要な天下泰平の印なのだと老人は答える。

さらに、魔を払う桑の弓のことや八幡神の威徳、八幡宮の由来を語り、実は我こそ八幡の末社高良（こうら）の神であると名乗って姿を消してしまう。〈中入〉

やがて男山に妙なる音楽が聞こえ、高良の神（後シテ）が出現して舞を舞い、平和な御代を寿ぎ、八幡の安穏守護を誓いを称える。

狂言「二人袴」

今日は聟入り（結婚後、妻の実家に初めて挨拶に行く事）の日。舅の家では準備を整え、聟が来るのを心待ちにしている。一方の聟は、一人で行くのは心細いからと父親に舅の家の門前まで付き添われてやってくる。聟に礼装の長袴をはかせてやり、父は表で待っていたのだが、太郎冠者に見つけられてしまい、父親も舅に挨拶することになってしまう。しかし、長袴は一つだけ。さて、この親子はどうやってこの場を切り抜けるのか…。

能「隅田川」

春の夕暮れに、隅田川のほとりで渡し守（ワキ）が客を待っていると、旅人（ワキツレ）から物狂いの女が後からやってくると告げられる。やがて現れた物狂いは、我が子を人買いにさらわれて、はるばると子の行方を尋ねきたのであった。

伊勢物語の故事を引いて思いを語り、乗船の願いを渡し守に訴えると、気の毒に思った渡し守は狂女の乗船を許す。

川中へ出ると、やがて向こう岸より念仏の声が聞こえて来る。人買いに拉致された小児が旅に病み、路傍に捨てられ死んだ供養の念仏。去年三月十五日、まさに今日が正命日であると船頭は教える。それこそ、母が尋ねる子・梅若丸であったのだった。

土墳に案内され、悲しみに沈む母。人々にすめられて鉦鐘を叩き、念仏の中に加わる。すると…念仏の声のうちに我が子の声が聞こえてくるではないか。

母の目に、愛し子のまぼろしが現れる。しかし懐に抱くことが叶わない。

やがて夜が明け、あとに残るものは草の茂る塚ばかりであった。